

紹介

紹介

中国共産党史研究

石川 忠雄 著

昭和卅四年八月一日 慶応通信発行

A 5 版 三八〇頁 文献目録 六頁

定価五五〇円・送料五六円

三 上 詠 聴

およそ現代史の研究は、研究者自身が事件の渦中にあるか、或は余りにも身近かに直接間接見聞している事柄が多く、客観的に或は総合的に觀察判断を下すことを不可能ならしめるかたむきがある。

また登場する人物が現在なお政治的生命を持つて活躍しているところから、政治的考慮が払われて事件の内容言行が資料として発表されない。のみならず、よし発表されても同様の考慮から故意に曲筆される場合もある。それでも事実に近いだけに無数の雑多なインフォメーションが資料として出て来るわけである。然しこれを蒐集することに時間と労力を要するので非常な困難を伴う、のみならずこの読破、批判、取捨に非常な労力を費さねばならない。こうした困難を克服せねばならないところに着実な客観的な成果を充分に期待しにくい傾向を持つている。

こうした欠陥が、研究の面にも現われて、真に歴史的研究の名に

ふさわしい研究成果は民国以後を対象とする研究には見られない。然し現在を理解をするためにも、また現実政治の要請からも現代史の研究が緊急を要する者なるを失わない。かくて現在、中国を直接指導する中国共産党史の研究は、日本の我々には地理的条件からも、現実的政治の面からも、また学問的研究の面からも焦眉の急でなければならぬ。

中国共産党が一九二一年成立してから、早や四十年の歳月を経過したが、その成果として見るべきものが少い。そうしたなかにも日本における在来の歴史的研究は、大体二つの類型にわけることができるとはいえない。

一は、単に革命運動の経過を年代順に羅列叙述する、そのためにその間に必要な資料をそのまま機械的に配列紹介することゝまり、歴史学的批判考証によつて研究をすゝめようとはしないもの、ということとは歴史学専攻の研究者による労作のようには見えない。

後者は、マルクシズムの立場から、まず事件の歴史の意義を確定しおいて、それとの関連のもとに革命運動の展開過程を叙述し、革命運動について各個に失敗の原因を記して運動推進の鑑とする体のもの、そしてコミンテルンの関係については全然ふれようがない。これまた前者同様歴史研究の立場をといっていないようである。ということとは、少くともいまだともに史家による研究の成果がでないといふことである。

いま、こゝに、石川忠雄氏の着実な実証的研究による成果「中国共産党史研究」の上梓をみたことは、早天の慈雨として心からよろこびたい、と共に本書の内容の一斑を紹介し、いさゝか感想を述べることとする。本書は、氏の昭和二十八年から三十三年の間に

物なされ、主として慶応大学法学部の機関紙「法学研究」に発表されたものを表題のもとに時期別に取捨撰択し、補訂して一書にされた論文集であつて五篇と附篇と中国共産党史関係主要参考文献目録とからなつてゐる。以下目次をかゝげる。

第一篇 中国共産党史概観

一 中国共産党史概観

第二篇 中国共産党の成立と第一次国共合作の時期

一 第一次国共合作

二 京漢鉄道罷業と陳独秀

三 武漢政府時代の中国共産党

第三篇 ソヴェート革命および抗日民族統一戦線形成の時期

一 大革命敗退直後の中国共産党

二 李立三コース問題の一考察

三 李立三コースとロシヤ留学生派

四 江西ソヴェート期における抗日反帝統一戦線の諸問題

五 西安事件の一考察

―モスコと中国共産党との関係―

第四篇 中華人民共和国の時期

一 中華人民共和国三年の動向

二 中華人民共和国憲法の内容とその特質

三 中共とソ連

―その自主性をめぐつて―

附篇

一 アメリカの中国研究

二 ロバート・C・ノース氏による張國燾回顧談記録

三 書評 華崗著「五四運動史」

掲載書誌一覽

中国共産党史関係主要参考文献目録

以上の目次により、また全体を通して第二篇の三つの論文、第三篇の五つの論文が本書の主要な部分をなすものであることがわかる。第一篇概観は第二篇・第三篇の論文を位置づけ、ならびに理解のための導入をなすものであり、第四編は第二篇・第三編による解明の結果、毛沢東の指導によつて成立し着々成功しつつある中華人民共和国の現状の説明であり、その理解の上第二編・第三篇をよみなおすと、より明確に第二篇・第三篇の時期、すなわち一九二一の党成立より一九三七年の日華事変による第二次国共合作への發展過程の把握の重要性を知ることができる。惜しむらくは、第二国共合作すなわち抗日戦中から、第二次内戦を経て中華人民共和国成立にいたる間はブランクになつてゐる。これは著者今後の研究課題らしいが（はしがきにより）、早急に研究を推しすすめられんことを期待する。附篇の一は今後我々が研究上交流と共にお互に援助しあわねばならないアメリカの中共研究の現状の紹介であり、二はかつて中共の重要な幹部であつたが、毛沢東と衝突して除名された張國燾の回想録の翻譯であつて、研究者に資料を提供せんとするものである。文献目録も後学への好指針として便宜を与えんとする著者の好意である。従つて主として第二篇・第三篇を紹介することにす

る。第二編一の「第一次国共合作とコミンテルン」では、第一次国共合作の根拠として一九二〇年のコミンテルン第二回大会の「植民地民族問題にかんするテーゼ」、並に一九二二年の「中共二全大会宣

言」を直接契機とする在来の説、そしてその「国民党外に於ける合作を意図した説に對して、二全大会直後八月杭州の中央委員会におけるマーリンの「国民党内に於ける国共合作」(後説する)の提議並びに強力指導があつた合作を実現した」ことを述べている。

当時の共産党総書記陳独秀が「国民党内の国共合作」にふみ切つた動機として、一九二三年二月七日の二・七惨案に求めていられる。すなわち、前年の杭州會議の決定後も党内合作に積極的でなかつた陳独秀(それまで積極的な労働運動の展開で党の成長に望みを嘱していた)が二・七惨案における党勢の大打撃強大な反動勢力の力量を身にしみて実感した彼が共産党に對する過大評価をやめて、国民党統制下の合作にふみ切つたことを、二・七惨案前と後の陳独秀の論文によつて実証されている。

三「武漢政府時代の中国共産党」においては、当時共産党にコミンテルンを含めて四つのコースがあつたとし、第一コミンテルンコース、第二陳独秀コース、第三瞿秋白コース、第四毛沢東コースをあげている。毛沢東のコースは農村重点主義であり、瞿秋白のコースは都市重点主義であり、労働者を指導者とするコミンテルンコースに最も近かつたとしている。さて当時の主流派陳独秀のコースは、陳自身中国革命がブルジョア民主革命と社会主義革命の二段階なることは認めるが、前者は資産階級が指導する。後者はプロレタリアが指導する者とし、前者の成果は資産階級の選手国民党の獲得する者とし、プロレタリアは次の段階における準備をする者と理解して、コミンテルンのブルジョア民主主義革命のヘゲモニーを確保し、国民党内における国共合作を維持しつゝ、農民運動を含む革命諸政策を実行し、国民党内指導権を強化し、結局プロレタリア

ート・農民その他の被搾取階級の民主主義独裁から社会主義への移行にもつていこうとするコミンテルンのコースと根本的に相反することを述べている。

こゝに一九二七・四月の中共五全大会において陳独秀と瞿秋白・毛沢東と意見の衝突を來たした原因があるが、五全大会に關する文書が見られない今日これ以上の究明は無理ではないかと思われる。

第三編一「大革命敗退直後の中国共産党」は、一九二七年八月の八・七緊急會議から、同年十二月の広東コミューンの間主とし瞿秋白指導下のソヴェート運動期にいたる過渡期の解明であつて、コミンテルンのコースに一番近い瞿秋白が、都市を以て革命の決定的要素と考え都市労働運動工作を重視し、大革命敗退直後の革命退潮期にもかゝわらず、コミンテルンの西欧的革命方式の機械的適用によつて都市重点主義の方針をとつたことを実証している。

二「李立三コースの一考察」は労働運動指導者としての李立三の指導は、コミンテルンの農村を重視しつゝも、より一層の労働運動の重視の線であり、コミンテルンは都市における武装蜂起の道をあゆむ李立三のコースを阻むものではなかつたとする。これはコミンテルン自身中国革命の特質としての革命の不均等を認めながらも、毛沢東の「武装した革命農村を以て都市を包圍する」ところまで具体化し得なかつたコミンテルンの指導に由来するものとする。かくてコミンテルン・中共中央共に徐々に農村重視に傾きつゝも、前記毛沢東コースへの転換までいかなかつたことを物語るとなしている。

三「李立三コースとロシア留學生派」においては、李立三コースの特徴として、革命發展の不均等に對する正確な認識をもちなかつた、そこから極端な都市工作重視主義が生れる。これに對し、ロシ

ヤ留学生派（陳紹禹・秦邦靈・張聞天ら）は、農村工作を重視はしたが、農村工作重点主義にはいたらず、依然として都市工作重点主義に立脚し、李立三コースとの差異は基本的には見出されない。こゝにコミンテルン派遣代表ミフをバツクとする前記二派の権力闘争の傾きあることを指摘されている。

四「江西ソヴェト期における抗日反帝統一戦線の諸問題」は一九三一年十一月から一九三五年まで瑞金時代の抗日問題を取扱ひ、当時の主流派（陳・秦・張ら）は、農村工作を推進する毛沢東に対して、紅軍に中心都市の奪取を要求して都市大衆から遊離した冒險政策の実行を求めた。そして日本の大陸進攻に抵抗する抗日は、国民党を帝国主義の傀儡とする、民族ブルジョアを革命の敵とする意味にてこれを除外し、また国共両党間に介在する中間派も反革命としてこれを排除している。これに対して毛沢東の態度は、その依拠する材料が留学生派の党権掌握下に発表せる者であるが、その限りにおいて前記留学生派の態度と差異なく、コミンテルンまた差異を見出せないとなしている。

五「西安事件の一考察」においては、一九三五年一月の遵義会議による毛沢東の党指導権奪取後の事件であるが、この事件においては、コミンテルン乃至ソヴェトは、蒋介石の釈放について政治的・道義的サポートはしたが、主として中共中央独自の判断にもとゞき行われたものなることを抗日全民族統一戦線形成と抗日統一戦線交遷（蒋介石を抗日統一民族戦線構成の一要素とするにいたつた）の過程より実証されている。

以上の八編の論文が本著の主要な部分を構成するが、その外第四篇に三つの論文が編載されている。これらは歴史的研究というよ

り、現在中国の政治的動向の本質理解に資するためものせられた小論である。

一「中華人民共和国三年の動向」は一九四九年十月一日を以て成立した中華人民共和国成立後三年の革命成長の過程を要約的に述べている。この期は民主主義革命の要求をみたしつゝ、社会主義への条件をつくり上げていく期間ではあるが、それと共に戦後の荒廢の復興段階であつて、この三年の復興期を終つて、本格的な社会主義建設の時期に入るのである。

二「中華人民共和国憲法の内容とその特質」は、一九五四年九月二十日に公布された憲法によつて建設期に入った新中国の基本的方向を知らしめ、現状と将来の理解に資せんことを意図したものである。

三「中共とソ連——その自主性をめぐつて——」は、中共の対ソ自主性の問題であるが、これには著者が前記第二篇・第三篇の研究成果によつて歴史的にみて中共党は一九二一年の党成立より一九三五年一月遵義会議による毛沢東の党権奪取までは、ソヴェト乃至コミンテルンの直接指導によつて人事・政策が決定したが、遵義会議以後はソヴェト、コミンテルンの指導（援助はあつても）はなかつた事実により、またモスコウと毛沢東の戦略に都市工作重点主義と農村工作重点主義の相違があつたこと並びに毛沢東の革命運動が彼自身の独力で行われた事実によつて対ソ自主性は強化されてきた。そして意見の対立はあつて共産陣営の共同の鉄則はくずれず、この前提の下に対立意見は処理されることを毛沢東の過去（一九二七年以来）の経歴のなかからも判断されるとなしている。

附篇の三編のうち一「アメリカの中国研究」は著者のアメリカ留

学中に見聞したアメリカの近代中国研究の紹介であり、近代中国研究は西歐からアメリカに移っているから、こゝに注意してその成果の利用すべきをのべておられる。

二「ロバート・C・ノース氏による張國燾回顧談記録」は、張國燾が李大釗のマルクス主義研究会の重要メンバーであり、党草創時代、中共党創立者の一人であり、その後党の要職につき、瑞金時代は中華ソヴェート共和国臨時政府の中央執行委員で人民委員会の副主席であつた。西遷後は軍事委員会副主席、陝甘寧辺区主席であつたが、西遷頃から毛沢東と対立、その不一致の増大は一九三八年党籍を解除されるにいたつて現在香港亡命中というが、この経歴からも党史研究の重要な資料の一たるを失わない。

三書評華崗著「五四運動史」はマルクシズムの中国革命史観究明の対象として取あげてもよいという。

最後に第一篇の「中共共産党史概観」は、前記第二・三・四篇の諸論文をよむための導言であり、これによつて各論文の党史全体における位づけをし、読者をして容易に理解せしめんとする好意を以て編載されたものと思う。

さらに、巻末に党史研究の重要参考文献を邦文・華文・歐文の三つに分けて六頁にわたり掲載されて斯学研究の便に供しておられる。

以上を以て大体の紹介を終えたが、最後にいさゝか感想と希望を述べて今後の御示教を仰ぎたい。

本書は著者も云えるが如く論文集であり、通史ではないので中共党史全体とし体系化されたものではない。随つて中共党史の全般にわたり通観することはできない恨みがある。この期の一歴史において

ても、研究の端緒にすらついていないのが現状であつて、各論文の註記に見る如く、よくこゝまで資料を博捜し博覧できたものとまず敬意を表せざるを得ない。著者所属の慶応大学図書館には小泉信三前塾長が集めて寄贈された中共初期の今日では入手至難の文献を所蔵されているので、この研究に手を染められたことゝ想像するが、つとにアメリカの中共研究に着目されてその成果の利用と両々相俟つて資料を整備してこの成果を挙げられたのであらう。

したがつて、アメリカの研究者 Benjamin Schwartz, Robert North, Conrad Brandt, John K. Fairbank などの研究成果に負つてころ大なるものがある。こゝに Benjamin Schwartz の Chinese Communism and the Rise of Mao は特にその感が深く。

ということは本書には一見してアメリカ的な体臭を覚えるものがあるような気がする。ことに第二篇の一・二の論文によく出てくる党外合作・党内合作の概念は著者も「どうとく」 Schwartz, Brandt, Fairbank の共著の A Documentary History of Chinese Communism と出づる the Bloc Without, the Bloc Within の訳であらうが、第一次国共合作と第二次国共合作の相違は、前者は「国民党統制下における合作」、後者は「国民党統制下における合作」の差異がある。前者は当時共産党が未だ幼弱な存在で中共側は対等合作を希望したが孫文の容れるところとならず、国民党党章に従うという条件の下に共産党員の個々の入党が許されたわけである。後者においては、中共党は西北に追いつめられてもすでに自身の主権と領土と人民を持ち、これを独自の武力を持つて保衛し革命を推進する地方の一独立政権にまで成長して居つて、この合作は共産党としては対等合作であるが、形式的には「国民党統制下の合作」

であつた。従つて the Bloc Without, the Bloc Within は「国民党規制下の合作」「対等合作」とした方がより実状に合致し、より理解しやすく適当なのではないか、少なくとも党内合作・党外合作という言葉は当時の中共文献に出て来ないところから提案してみたい。ということとはこれが内容について批判を意味しない。

本研究は、はしがきにも言える如く、「主として中国共産党のパーティ・ラインの変遷と毛沢東コースの成長過程をコミンテルンの影響と革命情勢の変化との関連において考察」されたもので、また共産党史を政治的社会的運動の面において捕えたものであつたから、その各時期の主流をなす指導者の主持する運動の基本的ラインの解明につとめられた。それが遵義会議までコミンテルンの直接指導によるところから、コミンテルンの指示のラインとの関連において究明された。従つて党の中心をなす動きにとゞまり、個々の歴史事実については言及されていない。著者もその点では今後の課題として「党史の持つ個々の問題について新たな資料の探求と諸外国の研究とを基礎として、われ／＼の過去の研究成果を地道に批判検討し、つねに新しい成果を生みだすことによつて一歩一歩党史研究のレベルをたかめて」いかねばならないとせられる。

現在資料の入手難（第一資料の提供者となる当事者が現在なお政治の中枢にいて、手記その他の直接資料が出て来ない）と研究の現段階において、党史研究の面でこれだけの実証的裏づけのある着実精緻な成果は実に本書を以て高矢とすると云わなければならぬ。しかしあえて望蜀の感をいえば、本書に毛沢東コースの形成の過程を整理して一編として編載されたならば、たとえ重複はするものもより一層の精彩をそえ、且つ後学をして益するところ大なるもの

があつたであらう。

筆者には註記に見える資料において未見のものが多く、一々各資料にあたり検討できないため適当な批判はできないが、国共両党は中国の統一・独立・近代化をめぐる、なえる繩の如く見えつかれたのであるから、今後国民党側の資料の探求とその上に立つ研究が必要なのではないか。ことに著者の今後の研究課題である抗日戦期から第二次内戦期にかけては全く未開拓で、日本の党史研究という分野では本研究とてもわずかに基礎工事の竣工という段階にはすぎないが、とにかくこれだけの成果をあげられたことは著者の資質と努力に待つものであつて、万人共に首肯せねばならない。そして党史研究のみならず、現代史の研究、また現代の政治経済の研究においても、研究の手引きとして研究者の座右に備えねばならない必携重要文献の一つとして永く利用されることであらう。そうした意味において巻末の参考文献に簡単な解題を附せられることと、年表を附録されることを再版において考慮されたい。

以上贅言を述べたが、筆者の不才、努力の不足が却つて本書の価値を穢してはいないかと著者にお詫びする。（一九五九・一一・二六）